

芥川龍之介「鼻」の取り扱ひ

——自分で考えながら読む楽しさを味わわせようとして——

古 山 節 子

I はじめに

この報告は、教師になって二年目、ひたすらよかれと思って試みている時、その心が、自らの意のままには相手に受け入れられず、困ってしまつて、できればなぐさめられたがつている記録である。自らを厳しくいましめると同時に、一方で失敗を失敗として、一つの価値付けしがつている甘さも含めて、因らなければならなかつた原因など、あるがままにご報告して、みなさまにご指導をおねがいしたい。

教科書は好学社の「高等学校現代国語一」を使用し、生徒は広島県大下学園祇園高等学校一年六組の五十名である。実践の日は、昭和四十三年六月八日から、六月十九日までで、指導時間は六時間かけた。

この一年六組の生徒は、他のクラスと比べて特におとなしい。しかし深く沈潜して考えるよさがある。指導者わたくしと生徒との関係は、「先生、きょうの国語の時間のはじめに、きょうは低気圧だといわれましたが、何が原因ですか。わたしたちにも相談してください」といって生意気なのですが、先生のことをいろいろと知

って勉強したいのです。」とひとりの生徒が書いてきたことで代表されるような関係である。

なお、生徒たちは四・五人を除いてほとんどこの「鼻」を中学校で学習している。

I 課題

1 学習の目標

- 学習の目標を、次のように定めた。
- 一、表現を通して、作中の人物の特徴をとらえる。
 - 二、表現を通して、作者のものの方考え方を知る。
 - 三、近代小説の構成をとらえることによって、主題をつかむ方法を学ぶ。

2 指導の課題

指導者自身の課題を「小説を読むことの楽しさを自分で考えることによつて味わわせる。」とした。そのために、指導者は知識や解答を知っているままに与えるのではなく、生徒の持っているものを引き出す授業になるように心がけた。

この課題をあげた理由は、過去わずか一年の経験から、生徒は自分で考えず、明確な答えだけを要求し、その答えを試験にそなえて覚えておく傾向があり、ひとつのことに時間をかけて考えたと退屈し、教師が自問自答することになりやすいのではないかと懸念したからである。

Ⅲ 指導の実際

1 時間目（六月八日土曜日）

この時間の指導の目標を、次のように定めた。

- 一、芥川龍之介の作品の傾向に、興味と関心をよびおこす。
- 二、作品の一次鑑賞のためと、学習の目標一、二、三を達成するための導入の予告も与えながら黙読させる。

この目標を達成するための実践を、次のように行なった。

a 導入

○芥川龍之介の作品で、読んだことのあるものをあげさせる。

○芥川龍之介の紹介（母の発狂が作品に大きな影響を与えていることなどを簡単に）。

b 黙読

○内供の心理の変化のポイントとなると思う所に——線を引きながら読む。

○後で感想が言えるように読む。

○わからないことばの読み方、意味を指導者の巡回中に問う。

c 宿題の提示

○感想文を書いてくること。二、三枚程度

この日生徒たちは、熱心にまじめに、音を立てる者もなく黙読した。指導者は、「おかしかったら遠慮なく笑って結構です。」とわ

ざわざ言わずにはおれなかった。

この日のうちに一次感想を言わせるつもりであったが、時間が足りなくなり、感想文は宿題とした。

2 時間目（六月十一日火曜日）

この時間の指導目標を、次のように定めた。

- 一、感想文発表。生徒の一次鑑賞の程度を知るためと、生徒たちに、他の生徒の考えも互いに知らせるためである。
- 二、学習の目標一、二を達成するために、教科書の補充問題A一を考えさせる。

目標達成のために、次のように実践した。

a 感想文の発表

アトランダムに指名した。ここには概略をあげる。

○最後にやっぱり長い鼻の方がいいと変わっていく所がおもしろかった。

○外面は堂々としながら、内心は苦にやんでいたことがおもしろかった。

○内供の心の動きがわかるような気がする。

○生れつきの顔などは、自然にさからわず、自然のなりゆきにまかせておく方がいい。

○まわりの人が、鼻が短くなったのに、どうして笑ったのか疑問である。

○わたしにも内供のように人のことばかり気にする面がある。

○表現がおもしろい。

「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい。」「長い鼻を明け方の秋風にぶらつかせながら。」など。

以上、まとめたものである。

b 教科書の補充問題A一の解答

①「『内供はいつものように、鼻などは気にかけないというふうをして』(P・45・下3)とあるが、この時の内供の心理をわかりやすく説明せよ。

内供は、ほんとうは鼻のことを気に(していた)が(自尊心)のために、わざと気にかけないというふうをしていた。

教師が右の「」内を板書して()内を自分で考えさせるようにした。むずかしいという印象をすこしでもやわらげるための配慮である。

②「『どうもこの解釈だけではじゅうぶんに説明がつかないようである。』(P・49・上1)とあるが、ではどう解釈すれば説明がつかぬか。

「(長い引用)
＝
「(ひとまとまりのことばで)」
」

と板書して教科書から、抜き出させた。

③「『愛すべき内供』(P・49・下2)という表現があるが、『愛すべき』ということは、内供のどんな点をさしていると思うか。」

▽「今度は、自分で考えるように」と指示するが、わからないので、
▽「『愛すべき』とはどんな時使うか」と問う。

「好意をもっている時」

「いじらしいと思っている時」
という解答がでたので、

▽「では、内供の『どんな点』がいじらしいか。」と問うがまだわからない。そこで、

▽この時
鼻——(短くなった。)
周囲の人——(笑った。)
内供——(不快に思った。)

ことを明らかにする。

▽「鼻が短くなったことが、内供には不快であった。このことは不思議ではないか。」と周囲の人に惑わされる弱さに気付かせるようにもっていく。以上で時間切れになった。

感想文はほとんどの生徒が書いてきていたが、アトラダムに発表させた。これらの感想文からいえることは、表面的なおかしさに注目したものの、教訓にとらえたものが非常に多いということである。この感想文は、教科書の補充問題を考える時に補い解説して、疑問や誤りを解決していくことにした。

この時間に③「愛すべき内供」の問題を終える予定であったが、表現を通して内供の特徴をつかむという作業は、生徒にとっても、非常にむずかしかったようで、次の時間にまわした。

生徒のこの日の学習日誌の感想によると、

「内供の鼻が短くなって、みんなが笑ったことが印象に残った。」

「きょうの国語はとても楽しかった。」

であって、むずかしいけれど、表面には書いてないことをあれこれ

考えながらさぐること、**「楽しみ」**を見出し出している。

3時間（六月十二日 水曜日）

この時間の目標を、次のように定めた。

一、学習の目標一、二を達成するため、教科書の補充問題を行なう。
実践

a 前時のつづき。

③をまとめて解答を言わせる。

○鼻が短くなったのに、周囲の人が笑うので内供は不快になった。そのように人のいいなりになる点。

○「ここには作者の内供に対するどんな気持ちが見われているか。」と質問する。

○自分と同じだといとおしんでいる気持ち。

④「内供は最後に『こうなれば、もうだれも笑うものはないにちがいない』（P・51・下9）」と考えるが、ここには、内供のどんな心理が表われているか。」の問題を考えた。

この時

鼻——（再び長くなった。）

周囲の人——（もう笑わなくなった。）

内供——（暗れ暗れとした気持ちになった。）

を明らかにして、

周囲の人が笑うか笑わないかばかり気にしている弱い心理。

にもっていった。

この日も前時と同じく長く時間がかかった。

④の問い方自体にも問題があるのではないだろうか。答えがわかってから、この教科書の問いを考えると、意図することがわかるが、問いからだけでは、答えが出にくいのである。

生徒は、「内供の鼻が短くなったり長くなったりするのでおもしろい。」と感想を述べる一方、「授業の時、もうすこしみんなてきばきと発言するように努力したい。」というのである。指導者は、「すぐ答えがわかるならば、考える必要もなく、てきばきと授業がすすめられましょうが、わからなくて考えること自体がいいことです。」とそのノートに書いて示すと同時に、次の時間にそのことをみんなに知らせなくてはいけないと思った。

4時間目（六月十五日 土曜日）

この時間の指導の目標を、次のようにした。

一、学習の目標一、二を達成するために、教科書の補充問題A一を考えさせる。

実践

a 指導者の気付き

前時の学習日誌を読んで、生徒たちが授業中に、一見何も言わなから授業が進んでいないようだが、みんなが真剣に考えている姿が尊くて、非常にレベルの高い学習をしているのだと認識させておく。

しかしこんな生徒もいることをうっかり忘れていたことに気付き

あわてて、こんな勉強方法の好きな者を問うた所13、きらいな者を問うた所13、という結果であった。

b 前時のつづき

⑤「長い鼻を明けがたの秋風にぶらつかせながら」というこの小説の結びには、どんな味わいがあるか。」

を考えるために、次のように補助質問をしてみた。

▽「『明けがたの秋風』からどんな感じを受けるか。」

○すがすがしい感じ。

○さびしい感じ。

○わびしい感じ。

▽「この時の内供の気持ちはどうか。」

○晴れ晴れとした気持ち。

▽「内供は自分がひとのことばかり気にしている弱い存在であることに気付いているだろうか。」

○いい。

▽「作者は内供が気付いていないことを知っているか。」

○知っている。

と、この時の情景を生徒のおおのに、印象深く形象化させると同時に、内供の気持ち、作者の視点などを気付かせて、次に

▽「ではこの表現にどんな味わいがあるか。」と問うがわからぬ。そこで

▽「秋風のわびしさと、内供の晴れ晴れとした気持ちはつりあうか。」と問うと

○つりあわない。

▽「では作者は内供のことをどう思っていると思うか。」

○あわれだと思っている。

○同情している。

○かわいそうだと思っている。

という答えがあったので、いずれもこれらのことは、何らかの形で優者が劣者を上から見下したことであることを説明して、

▽「作者には内供のような弱さがなくて、自分は強い人間だと内供を上から見下ろしているだろうか。」と問う。

○ちがう。

○やりきれないな—とためいきをついている。

○内供が人のいいなりになる弱い人間であることに對して、人間はだれでも同じだと、作者はしみじみと悲哀を感じている。

とやっと指導者の到達したところまで、考えついた。

この日は一時間中この問題について考えた。指導者自身にもこの味わいはむずかしい。だから、生徒のわからないのもむりないと思いつつも妥協できなかった。何とかしてわからせようと、「あなたたちは、今一流の小説の読み方をしてる。これを考えることができたなら、どこへ行っても恥ずかしくない。」などと自らにもいいかせながら、一時間中ことばを探しまわった。指導者自身が一番考えた充実した時間だったと思う。生徒は「鼻という小説のむずかしさを感じた。」「私が、この小説を一番はじめに読んだ時は、おもしろい小説だなと思っていましたが、授業で習っていると、だんだんむずかしくなったので、あまり好きではありません。」と書いてきた。わたくしはこの時、「困った。」その理由は後に述べる。

5時間目(六月十八日 火曜日)

この時間の指導の目標を、次のようにした。

一、目標三の達成のため、三段落に分け、内供の心理の変化を明らかにさせる。

a 構成（三段に分ける）

内供の心理の変化のポイントとなる部分を問答形式で指摘させながら教師がまとめて板書した。

①一段

禅智内供

鼻の長さ——五、六寸
気にやんだ。

その理由 { 1、不便
2、自尊心の毀損

自尊心毀損の回復の試み。

1 消極的 { 1 短くみえる工夫。
2 実際の人で自分と同じ人を探す。
3 書物の中から探す。

2 積極的 { 1 からすうりをせんじてのむ。
2 ねずみのいばりをなすりつける。
3 ゆでてふむ。

← 短くなった。

内供Ⅱのびのびした。

(まとめ)

生徒各自に、板書を参考に第二段のあらすじをまとめてノートさせ、教師は巡回してその出来具合を調べた。

ここに板書としてあげたような部分が、教科書を最初に読んだ時線を引きであることが望ましいと言っておいた。

この構成のまとめは、書いてあることばを用いてまとめればよいし、また先に深く考えてもあつたので、スムーズにいった。あらすじのまとめ方も説明し、ノート指導もあわせて行なつた。生徒は自分の力に依りてできるので熱心に書いてまとめた。

6時間目（六月十九日 水曜日）

②第二段

鼻——短くなった。

周囲の人——つけつけと笑つた。

その理由 { 1 顔変りのせい
2 傍観者の利己主義による。

内供Ⅱ鼻の短くなったのが、かえつてうらめしくなつた。

(まとめ)

生徒各自であらすじをノートにまとめさせる。

③第三段

(まとめ)

鼻は再び（短くなった。）内供は、そのために、（もうだれも笑うものはないにちがいないて）と思うと、（はればれとした）気持ちになつた。

と板書して、（ ）内をうめる。ここで①②③の鼻の長さの変化に従つて、内供の気持ちが「のびのびした。」「うらめしくなつた。」「はればれとした。」と変化する構成に注目させ、主題をつかませるように暗示した。

問題四、

「この小説には、人間に対する作者のどんな見方があらわれてい

るか。」を考えさせた。すぐに解答が出た。

▽「これで終わるが、内供はこれからどうなったと思うか、興味の
ある者は原稿用紙に何枚でもいいし、いつまででもいいから、書
いてもってくるように。」と指示して終わる。このクラスからは
まだ誰も持って来ないので一年五組のを参考資料としてあげてお
く。

資料

「わたしの思うこれからの内供

内供はもとどおり長くなった鼻を、もう気にかけてたり、くよく
よ考えなくなりました。そして、中童子なども、あざけ笑ったり
しなくなり、内供は「これで良かったのじゃあ。」としだいに思
うようになりました。

ところがある日、町まで買物に出た内供は、いつもそこそこか
くれて歩いていただけで、その日は、みんなに長い鼻を強微させ
るかのようになり、歩きました。そこへ母親に手をひかれて歩いてい
た五つ六つばかりの男の子が、母親に「あれが欲しい、あれが欲
しい。」と内供の鼻をさして、いい出しました。その母親はびっ
くりして「すみません。まあ、この子つたら」とすまなそうに
内供の顔を見ながら叱った。その後、子供はじっと、内供の顔を
うらめしそうに見ていた。母親は小走りに子供の手をひっぱって
店の中に入っていった。

まあ、その子供はなんにもわからずに、そんなことを言ったの
でしょうが、内供の心は前のように雲った空みだだった。

用事が済み、お茶でも飲んで帰ろうと思ひ茶店へ入った。そこ
でお茶をもって来た娘が内供に「池の尾で有名な長い鼻の内供さ

んとやらは、あなたのことですか。」と笑いながら聞いた。そこ
で内供は、おこるのもなんだと思ひ「そんな奴は、知らぬ。」と
娘の持ってきたお茶をもうと思ひ、長い鼻がじやまになって
のめない。そばにいた娘やお客がクスクス笑っている。そこでせ
き払いをして、「串だんごを頼む。」と大きな声で言った。串だ
んごを食べたあとでもどがかわき、いそいで家に帰り、中童
子に鼻もたげの木をもって来させて、ゆっくりお茶をのんだ。そ
れからというもの、決して町に行かなくなった。

やはり内供は世見の目を気にしてなんにもできない。しかし内
供はこんなことをずっとくり返すのが問題です。そしてどうや
って立ち直るかが、本当に私たちにもわからない問題です。」

という想像力豊かなものである。

今にして思えば、最後の作者の人間に対する考え方を生徒に時間
の制限を与えずに自由にいわせれば、もっといろんな指導者の予想
せぬ意見が出たかもしれないが、正解と思われるものがひとつ出た
所で早々に打ち切ったのが残念である。

Ⅳ 反省と今後の課題

反省を述べる前に、生徒の反応を見てみたい。

まず、わたくしがこの報告をしようとしたのは、4時間目を終わ
って、生徒の持ってきた日々の学習日誌の感想「私がこの小説を一
番はじめに読んだ時はおもしろい小説だなと思っていました。授
業でならっていると、だんだんむずかしくなってきたので、あまり
好きではありません。」を見てからである。わたくしはこの授業を
通して、生徒がいつそう「鼻」に興味を持ち、また表面に現われて
いることばだけでなく、作者の深い考えに驚きながら、もっと他の

作品も次々に読みたくなるようになってもらいたかった。ところが、だんだんきらいになられたのでは、根本的に失敗だったのでないかと思わずにはいられた。そこで「このような勉強方法は好きか」と問うた所、クラスの1/3が挙手し、きらいな者を問うたところ、同じように1/3が挙手した。成績のいい者も悪い者も、両者に分かれた。特に文学好きな者が、この学習形態を好むこともわかった。

次に、学習がすべて終わって、自由に書かせた感想文について考えたい。

○ 中学校の時も鼻を習ったが、あの時は「おもしろい小説だな」としか思わなかった。今度授業で習ってわたしの今までの小説の読み方がいかにつまらないものでしかなかったことがわかった。しかしひとりでの本を読もうとするともうどうしていいかわからなくなる。

○ 「愛すべき内供」を長い間考えてわかった時はうれしかった。楽しかった。

○ もっと早く進んでほしい。

○ もっと積極的な授業にしてほしい。

などであるが、「わかった時はうれしかった」という単純な肯定から、深く考えることのよさもわかったが「他の本をひとりで読もうとするともうどうしていいかわからない」という発展的な考え方で出て、「てきぱきと進んでほしい」という生徒の希望に悲観していたのがすこし安らいだ。

野地先生から、生徒の反応に一喜一憂するのではなく、冷静な自己の評価が必要である。しかし、それよりももっと大切なことは、

教材勉強をおろそかにしなかったか、生徒の質はこの程度しかないからなどと妥協しなかったかである。とご指導いただいた時は、うかつだった己れが恥じらわれ、顔を上げることもできなかった。

また他の先生方からもいろいろなご指導いただいた。

二時間目の感想文の発表から、いきなり教科書の補充問題へ移ったことは生徒の主体性をどれだけ生かしたことになるか。

「鼻」の中の芥川龍之介の地の文の処理の仕方。

五・六時間目の方法でうまく目標三が達成できるかどうか。

古山節子という人間個人の中のマンネリ化した発想など不十分な所の多い実践であった。

何よりも大切なことは、たゆみない教材研究であることはいうまでもないが、わたくし個人にとっては、冷静な情勢判断をしなければいけないことだろう。

(広島県大下学園祇園高等学校教諭)